

VI その他の活動

しーきゅうぶ東海村は、視察プログラムを通じて原子力施設の安全対策を学んだり、原子力防災を議論したりするだけでなく、火力発電所やリサイクルセンターなどの環境に関わる施設を見学したり、他の地域で活動する団体との交流をしたり、原子力ティータイムを開催して住民の皆さんの声をうかがったりしてきました。

ここでは、原子力施設の視察や原子力防災の取り組み以外の活動を紹介します。

1. 臨界事故現場を見学

1. 事故現場の最後の姿が公開された

2004年12月、臨界事故を起こした株式会社ジェー・シー・オー（以下、JCO）東海事業所の事故現場の設備が解体されることになりました。東海村が行った事故現場の見学会に『提言する会』として参加しました。（ニュースレター「シーきゅうぶ」第16号 2005年1月発行より）

2. 実施概要

日時：2004年12月14日（他の日に参加した人も含む）

場所：旧転換試験棟（現第3管理棟：事故現場）、放射性廃棄物保管棟

参加者：13名

3. 臨界事故現場見学の感想

< 対応への感謝の言葉 >

現在後ろ向きの仕事しか残っていない現場で、我々見学者を迎え入れていただいたJCOの方々、説明の前に事故を起こしたお詫びを述べ、設備や作業内容などの説明も懇切丁寧でした。辛い立場でありながら、よく対応していただいたと思います。5年も経過した事故に対し、時間を超過してまで懇切丁寧に説明していただいたJCOの関係者にお礼申し上げます。

●感想その1

説明を聞きながら、事故が起きた原因について私は4つの理由があったと考えました。①作業基準不遵守、②安全教育の不完全と現場の安全管理の欠如、③設備のフルプルーフ思想の不完全、④作業発注時の外注安全管理能力の確認不十分です。この中の1つでも実施されていたら事故は発生しなかったと思います。どれも本来ならやらなければならない安全基準ですが、これが見事に4つとも抜けていました。最初は何処でも安全基準をきちんと守りますが、事故は何年かに1回、または生涯会わないこともあります。このような頻度の低い事故に対して、徐々に安全基準を守らなくなってくるのが人間の習性なのかもしれません。したがって、我々は、安全対策は十分手を打つが、片方で常に人間がやることは必ず事故が発生するという観点で安全対策を実施すべきではないかと思います。

東海には原子力関係の施設が多数あります。原子力技術は現状では必要な技術です。しかし、これを人間が操作するかぎり事故は皆無にはできないと思います。従って、事故が起きて安全でいられるような対策を、例えばコストが掛かろうが、実施することが現状でやるべきことと感じました。

また、人間の失敗の事例として事故現場は何らかの方法で残すべきと感じました。こんな良い事例は他にないと思います。

●感想その2

原子力の知識が無いのでさらに質問をしたかったが、それだけの時間がとってなく、後の見学者がくるという理由で打ち切れ、欲求不満が残った。また以下の点は、説明を聞いても納得できなかった。

当日作業した3名がこの現場が初めてなのにもかかわらず、前任者または直接上長から何の説明も受けていなかったこと。作業標準（もしくはマニュアルまたは作業要領書）が現場になく控室までは持ってきたが、当日は3名とも読んでいなかったこと。

最後に、核燃サイクル側の監督責任はどうなっているのだろうか。国の管理というよりは、より実際に近い立場の人間が初歩的な管理監督にあたらなければ、この種の事故は防げないと感じた。

●感想その3

- 見学は7人ずつに分けて行われた。施設の大きさから考えて、この程度の人数であれば説明も徹底し、各自が現場を充分に見ることが出来る。現場は放射線管理区域であり、入域するには「関門」を通らねばならない。関門は二重になって居り、最初の関門で靴下、手袋、白衣、ヘルメットを身につけ、靴を履き替える。少し行くと第二の関門があり、もう一度、靴を履き替える。原研OBの私にとって、この二重関門は初めての経験であった。
- 沈殿槽の写真は文献やパンフレット等で何度も見てきた。またNHKのTVでは、レプリカと人間模型を使った現場作業の説明があった。しかし、眼前にある現場の雰囲気は全く「別物」である。正に「百聞は一見に如かず」であった。製品である硝酸ウラニル溶液を均質混合化する過程で事故が起こった。作業場所は、そのまま保存されている。人力に頼った大変な作業であると察しがついた。後に作業の効率化のため、貯塔に仮配管を設け溶液をポンプで循環させる方法が用いられた。仮配管もそのままの状態でも保存されていた。溶液の出し入れが不便だったため、仮配管には更に改良が施された。改良型の仮配管も保存されていた。現場で作業の説明を受けた際、漏斗を支えていた大内さん、それにウラン溶液を注いでいた篠原さん、室外でウラン量の計算を始めた横川さん達三人の位置がよくわかった。推定被ばく、大内さん18シーベルト、篠原さん8シーベルト、横川さん2.5シーベルト。5シーベルトを境に生死が分かれた。
- 次に作業現場建家の外側へ廻った。建家の外側に循環ポンプと配管があり、水を循環させ沈殿槽を冷却していた。ここで冷却水を抜くための配管の取り外し作業が行われた。臨界（核分裂連鎖反応）が持続していたので、中性子とガンマ線が放出されており、作業は被ばくを避けるため次々に交代しながら進められた。最後に、廃棄物保管施設を見学した。ほぼ一時間の見学であったが、事故発生から臨界の終了まで、現場の人達の懸命な働きが眼前に繰り広げられているように感じた。
- 11月22日に東海村主催で、畑村洋太郎先生の「失敗学」の講演があった。聴衆からJCO事故現場の保存について質問が出た。先生からは「レプリカの展示では、後世の人達に事故の教訓は伝えられない。現場を保存すべきである。自由に意見の言える立場にある原子力関係者にとって、現場保存を主張することは後世への義務と考えるべきである。」と、明快な答えが返ってきた。見学を通じて、この言葉の意味が改めて理解出来た。

●感想その4

- 臨界事故を起こした沈殿槽室を見ました。仕事をするのには手作業で2~3人でしか出来ない化学実験室の様な感じでした。職員より事故当時の様子の説明がありました。以前作業した人達は隣に有る溶解塔で行っていたのですが、今回作業する人達は初めて行うので溶解塔の作り方及び操作が分からず、上司の人と話し合い、作業の早く出来る沈殿槽を使う事にしたとの事です。作業者は上司の指示により作業を行い、手順書等も見ないで製品作りを行っていた様に思います。事故の原因は会社の安全管理、臨界教育等を行わずに企業秘密として外部に隠していた結果だと思いました。
- 二度とこの様な事故が起こらない様に国では原子炉等規制法や原子力災害特別措置法も制定され、第三者による管理、監視のしくみも出来ましたが、私達の安全を守ることは、行政と原子力事業所と地域住民のコミュニケーション（対話）とコラボレーション（協働）を図ることにより達成出来るのではないかと感じました。

●感想その5

- 事故は、非形状管理容器に、臨界量のウラン溶液を流し込んだためとされているが、臨界事故を阻止できた閥門はいくつもあった。当時の安全審査体制では装置の軽微な変更でも審査期間に数ヶ月を要した。これでは激しい市場競争に脱落すると会社が考えたのは理解できる。それで、会社はルール違反を承知で非形状管理容器を使うとした。それならば、なにゆえ臨界量の定量評価が可能な核燃主任技術者を作業現場に立ち合わせなかったのか。さらに、中濃度ウラン用作業伝票に注意を喚起するマークもなく、伝票を示しながら対面で主任技術者と相談する習慣もなかったと云う。それで、電話で他課の作業責任のない主任技術者と相談をして作業を進め、事故に至った。事故原因は、作業者に対する臨界教育の欠如とされているが、そうだろうか。むしろ、事故阻止の閥門を意識的に設定していない会社組織の体質・安全意識に主たる原因があったと思う。役所の安全審査体制を含めて、安全管理体制が形骸化した故の事故ではなかったか。JCOには現在8000本の放射性廃棄物ドラム缶があり、施設の解体で更なる本数が追加されるとのこと。しかし、役所ではその廃棄方法/場所について未だに結論がでていない。事故後5年も経過した現時点においてもである。このため、JCOでは40名の管理要員が施設にはり付き、年間8億円の管理費が親会社より無駄に支出されている。関係者全員が熱い風呂に入り、我慢くらべをやっているらしい。死者のでた事故は悲劇だが、その後のことは何かしら喜劇的に推移しているようだ。役所は国民に対して原子力の安全を保障し、関係者を指導する実力が本当にあるのだろうか。法律上の数合わせをやっているに過ぎないようにも見えた。

●感想その6

- ①旧転換試験棟の設備は古くて貧弱である。大学工学部の実験設備並みであるように思われた。その上、通路が狭くて安全通路がないので、歩きにくくかつ不安全である。
- ②この施設を見学し、説明を聞いたときの直感として、JCOの作業者は、濃縮度18.8%のウラン燃料を、危険な放射性物質と考えたような慎重な取り扱いをしていなかったように感じた（原燃工と比較しての直感）。

- ③仄聞したところによれば、JCO では事故当時大学卒の技術者 21 人中 9 人が核燃料取扱主任者資格保持者であったとのことである。それにもかかわらず、この設備では種々の違反操業が長期間に渡って行われ、チェルノブイル原子力発電所事故（IAEA の国際評価尺度でレベル 7）、スリーマイル島原子力発電所事故（レベル 5）に続いて世界第 3 位の重大事故（レベル 4）を起こしたことはきわめて不可解である。
- ④JCO でこのような違反操業が長期間に渡って行われたにもかかわらず、JNC（ウラン燃料発注者）や国（旧科技庁）も殆ど何の指導も行っていなかったとのこと、両者の責任も問われるべきであろう。
- ⑤この JCO 事故は、その後の各種の原子力施設の事故の嚆矢と考えられ、弱小設備でも基礎を無視すれば重大事故につながるという教訓を示す好例と考えられるので、この設備の撤去が決定されたことは非常に残念に思う。

●感想その 7

- ・新聞や雑誌では転換試験棟を見ていたが、自らの眼で裸の原子炉を見た。沈殿槽本来ならきれいなステンレス鋼の機器で有るはずが、私は不気味さと言ひ知れぬ憤りを感じた現場であった。ここで核分裂を起こし臨界、大量の放射線を出した。壁側にある小さな机、そして機器を使うための狭い昇降階段。ここでお二人が放射線で尊い命を落としたのか。44 年ものづくりに携わった者として、この職場の環境に驚いた。最先端の原子力エネルギーの生産現場に安全管理や品質管理の作業手順などの表示が無い。中性子感知モニターも無い。まして、ウランを溶かすために使っていたステンレスのバケツと電熱器が当時のままに残されている。何か野放し現場を強く感じた。此れでは遅かれ早かれ何らかの事故が発生することを感じた。（お二人のご冥福を祈り部屋を出た）屋外での臨界を終息させるための冷却水を抜き取る作業の説明（多くの方が被ばくした現場）では、高線量下でのたいへんな作業を感じた（ホウ酸水やボロンなどは無かったようだ）。遮へい体で隔離されていない管理区域にも疑問を持った！！臨界発生から 20 時間。思わず携わった人に心から「ご苦労様」と頭を下げた。最後に事務所に戻り質疑応答の時間が有るのかと思っただが、門のところでご苦労様は何かあつけにとらわれた見学会だった。
- ・人間は間違いを起こす動物。現在起きている様ざまな事故は厳しい安全管理と品質管理がされていなかった場所で起きている。今回もそうだ。事故とは常に管理が甘い、そして慣れた職場で起こる。起きたことは仕方が無い。特に我々東海村の人達は原子力産業とは共存共栄を図っていかなければ成らない運命共同体であると思う。だからこのような事故を 2 度と起こさないためにも尊い教訓を生かさなければなるまいと思う。私は JCO のすべての装置を残すことは考えていないが、できれば沈殿槽（裸の原子炉）は現状の姿で残し、平和の鐘や警鐘の鐘にしたい。そして JCO の跡地には慰霊碑を作り平和公園にする。信頼される原子力産業のためにも、自分達の町は自分の手で守る。

●感想その 8

- ・先日の東海村主催の村内原子力事業所見学会で、すでに三菱原子燃料を見学して間もないこともあり、同じく核燃料製造の一工程を業としていたとの事前情報により、JCO もそれなりの規模で、技術的にもきちっとした設備をと想定していたが、

実物を一見したときの印象はえっ！これで燃料製造のビジネスをしていたのか？という感じであった。

- 最初の段階で貯塔で混合を行っていた作業を、効率化のために仮配管を設けてポンプで循環する方式にしたとき、科技庁の視察時にはその仮配管を撤去するようにしたとか、更に納期短縮のために沈殿槽を用いた作業に切り替えたとか、作業者は心に何かひっかかるものを持ちながらも、それが会社のためになるという考えで、あえてそれを実施したのだらうなと思えた。
- その際に、材料の濃縮度の勘違いやウラン溶液の物理的状态と臨界発生に関連の勘違いなどがあったと公判資料などに基いた説明があった。しかし、大内さん、篠原さんは、中性子反射体となる水が沈殿槽内部にある場合の臨界量とか、形状管理の意味など、臨界について十分理解しない状態で、道理に反した作業をせざるを得なかった。それまで私自身の心の底で、幾分「なんてことをしてくれたんだ」と思う部分もあった気持ちが変化して、やはり気の毒な犠牲者であると確信するようになった。設備が現状より相当大きく、それに応じて内部に存在するウラン量が相当な量になれば、それらの思いつきの改善を強行する気持ちにはなれなかったかもしれないが、実験設備的なあのような装置では、それなりの体制でチェックもするし、臨界事故なんかにはなりっこないと、安易に考えて作業方法の変更に突き進むということもあるだらうなと納得できた。
- 沈殿槽のある建屋の外には、臨界を終息させるための水抜き用配管が生々しい状態で残されていたが、強い放射線を浴びながらあそこで決死の作業を強行した人達のことを思うと、企業人の粹内とは思いながらも、その責任感、使命感に頭の下がる思いがした。

2. 原子力保安検査官事務所との対話

1. 原子力安全の監視役

しーきゅうぶ東海村が活動拠点としていた東海村合同庁舎には、経済産業省原子力安全・保安院東海・大洗原子力保安検査官事務所（現・環境省原子力規制委員会東海・大洗原子力規制事務所）がありました。原子力安全の要である原子力保安検査官の皆さんがどのような活動をしておられるのか、対話の会を行いました。（「しーきゅうぶ東海村」第5号 2007年3月18日発行より）

2. 実施概要

日時：2007年2月1日

場所：東海村合同庁舎

去る2月1日、東海村合同庁舎において、東海・大洗原子力保安検査官事務所の皆さんと「対話の会」を行いました。初めての試みであったため、自己紹介に時間をかけましたが、後半は、検査のやり方などについて活発な議論が行われました。今後の継続的な対話をお願いして会を終了しました。



3. 原子力以外の施設見学

1. 常陸那珂石炭火力発電所

2004年度、C3プロジェクトは、リスク情報の発信とリスクコミュニケーションの実施を課題に挙げました。このため、「提言する会」の皆さんを対象にリスク勉強会（C3 寺子屋）を2004年5月から始めました。リスクを理解し判断する能力を培っていただくための勉強会です。5月25日は、勉強会の一環として、常陸那珂石炭火力発電所を見学しました。（ニュースレター「しーきゅうぶ」第11号 2004年7月発行より）



東京電力 常陸那珂火力発電所 タービン建屋内にて（5月25日）
100万キロワットのタービン発電機は最高水準の効率を追求、環境対策も徹底

2. 東海村清掃センター

2010年の中央公民館講座では、この年名古屋で生物多様性条約締結国会議が開催されるのに合わせ、生態系や環境問題として関心の高い廃棄物問題を取り上げました。廃棄物も、一般廃棄物の問題から高レベル放射性廃棄物まで、幅広く扱い、廃棄物処分の現場見学も積極的に組み入れました。

村の出前講座「ごみのゆくえ」に申し込み、公民館講座参加者を加え、2010年11月4日、東海村清掃センターの見学を行いました。

4. 住民との直接的な交流の試み

1. 原子力ティータイム

NPO 法人になって気にかけてきたことは、より多くの人に関心をもってもらうことと、より多くの村民の声をきくことでした。残念ながら、東海村で気楽に原子力を語り合う場はありません。『提言する会』の活動を村民の皆さんがどのように思っておられたのか、原子力事業所の安全についてどんな意見をもっておられるのか、しーきゅうぶがやっていることは村民が期待する活動なのか。率直な意見を聞く場として、「原子力ティータイム」と命名し、住民の皆さんとの交流の場を設けました。

1) 最初は人集めに苦労

(「しーきゅうぶ東海村」第2号 2006年1月18日発行より)

原子力ティータイムを開催して

2005年10月20日(木)午後1時半より中丸コミュニティセンターで「原子力ティータイム」を開催しました。視察プログラムの報告会を兼ね、地域交流をめざした初めての試みです。前回視察した原子燃料工業(株)が報告テーマなので、近隣のみなさまの参加を期待しました。しかし、準備時間が不足していたため、お誘いした方はみなキャンセル。急遽コミセンで活動中の卓球サークルの5名の方に参加していただき、報告スライド上映と茶話会を行うことができました。ご協力ありがとうございました。

視察プログラムの活動成果を、フィールドワークとして実際に顔を合わせ地域に還元しようと考えましたが、まだまだ検討すべき点がたくさんあることに気づきました。次回は、より綿密に計画し、多くの方と語り合える実り多い原子力ティータイムにしたいと思います。



原子力ティータイムのひとつ

2) リスクコミュニケーションのグループと

(「しーきゅうぶ東海村」第4号 2007年1月26日発行より)

メッセージ作成ワーキンググループの皆さんと議論

2006年9月19日、日本原子力研究開発機構 核燃料サイクル工学研究所のリスクコミュニケーション活動の一環として「メッセージ作成ワーキンググループ」に参加している住民メンバーの皆さんと、NPO法人「ふれあいネット会」の方に、三菱原子燃料株式会社の視察結果を紹介し、しーきゅうぶ東海村の今後の活動について意見をうかがいました。同じように、原子力の安全と安心感の向上を目指す仲間として話がつきず、あっという間の1時間半でした。



3) ハーモニー東海第8期生と

2007年11月7日、ハーモニー東海第8期生の3名の方と、原子力ティータイムを行いました。特別な活動をしていなくても原子力の安全に関心をもっている人がおられることがわかりました。「話しやすい場だった」と評価していただくとともに、「こういう活動をしてもらえると安心できる」というご意見もあり、視察プログラムとその情報発信の重要性を再認識しました。



2. 東海まつり

2005年、2006年、2007年と、東海まつりに参加し、視察プログラムの活動を紹介するとともに、原子力に関するアンケートを行いました。



最初の年はなかなか声がかけれなかったが



2年目はちょっと積極的になり



3年目には早い時間にアンケートが終了

3. 環境フェスタ

2012年には環境フェスタにもチャレンジしてみました。



5. 他地域団体との交流

1. 柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会

『柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会』（以下、『地域の会』）は、2002年8月に発覚した東京電力の検査データ改ざん問題を契機に発足した組織です。『提言する会』と同様、2003年春から活動を開始し、今現在も継続的に活動が行われています。

（ニュースレター「しーきゅうび」第14号 2004年10月発行より）

『柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会』との交流会を実施（2004年7月21～22日）

『柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会』は、2002年8月29日に発覚した東京電力の不正事件を契機に、2003年5月に発足しました。

事業者や安全運転に関わる行政当局からの十分な情報提供に基づいて発電所の安全状況を確認し、地域住民の素朴な視線による監視活動を行うとともに、必要な提言を行うことを目的にしています。設立経緯には、‘リスクコミュニケーションの実現’も謳われています。

双方の有志による交流会を新潟県柏崎市産業文化会館で21日夜、3時間にわたって行いました。（写真は交流会の様子）

22日には、柏崎刈羽原子力発電所7号機を見学しました。柏崎刈羽原子力発電所は、1ヶ所での発電量としては世界最大です。また、6・7号機は、最新鋭の改良型沸騰水型軽水炉でもあります。ちょうど6号機が定期検査中だったので、たくさんの作業員の人と行きかいました。6・7号機の中央制御室がひとつの大部屋になっているので、通常運転中と定期検査中の作業を見ることができました。



『柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会』（『地域の会』）とは

「地域の会」の会員は、柏崎市、西山町、刈羽村に在住し、会が認める各種団体および地域の推薦を受けた24名の委員（任期2年）で構成されています。現在、発電所に対して賛成・反対・中立の立場の委員が8名ずつ参加しているとのこと。

東京電力の不正が発覚した後、柏崎市長と刈羽村長がフランスの立地地域で行われていた地域情報委員会の活動を見聞きし、同じような組織をつくろうと考えたのが発端です。（先進国の原子力立地地域では、地域住民を主体とした情報公開とコミュニケーションがさまざまなやり方で進められています。つまり、リスクコミュニケーシ

ョン活動がそれぞれの国や地域の事情に合わせて進められています。『地域の会』もリスクコミュニケーションをめざしたものです。）

全委員が参加する会合はすべて公開で行われています。会としての結論を出すということではなく、会としての提言は今年度はじめに東京電力と国に対して出したとのことです。活動は、ホームページですべて公開されています。

(<http://www.tiikinokai.jp>)

事務局は、財団法人柏崎原子力広報センターで、電源地域の広報安全交付金を活用しています。委員による運営委員会と広報委員会が中心となって、会の運営や情報提供活動が行われています。

交流会での議論の概要

原子力安全にかかわるさまざまな問題が約3時間にわたって議論されました。

<共通点>

『地域の会』も事業者からの説明を聞くだけでなく、視察活動を行っています。例えば、東電不祥事の発端となったシュラウド（原子炉内の燃料を取り囲むように設置されている円筒状のステンレスの機器）や再循環系配管、異物放置問題では物品管理状況について現場を見たとのこと。また、『地域の会』には住民への情報提供の任務もありますが、なかなか多くの住民の皆さんに活動を知ってもらうことができないということでした。なお、新潟の方では、町内会への加入率が高く、新聞折込ではなく、町内会を通じて『地域の会』の情報誌が全戸配布されています。



<相違点>

『地域の会』はいろいろな立場の人が参加しています。このため、会として一致した見解や提言を出すことは非常に難しいとのことでした。交流会の場でも、東京電力の姿勢や努力をどう評価するかについて意見が分かれました。また、原子力防災についても『提言する会』と同じように自治体の役割が重要だと考えられていましたが、『地域の会』で防災について議論はされていないようです。発足から1年、次々に起こる東京電力の不祥事や問題発覚について説明を受けることに終始したというのが実態だということでした。

<今後に向けて>

『地域の会』は今年度から会長・副会長を置き、運営委員会と広報委員会が主体的に活動方針を決めるようになり、委員が主体となった活動にしようとしています。『提言する会』もワーキングを設置して、自立的な活動を目指していきたいと思いません。

2. 『くらしをみつめる・・・柏桃の輪』

2008年10月24日～25日、柏崎・刈羽地域の市民団体『くらしをみつめる・・・柏桃の輪』の皆さん20名が来村され、交流会を開催しました。

初日は、原子力科学館でJCO臨界事故の状況やその時の気持ちなどをお話しました。その後、日本原子力研究開発機構で原子力発電所の燃料の安全性を研究している施設を見学しました。

翌日は、村上村長にも参加していただき、原子力とまちづくりについて議論したり、双方の活動に対して有益な意見交換をしました。（「しーきゅうぶ東海村」第8号2009年1月27日発行より）

『くらしをみつめる・・・柏桃の輪』とは

平成16年、原子力と共生する中で、正確な情報を得て、正しい知識を身につける必要性を感じ設立。現在、会員60名。ほとんどが女性。暮らしを支えているエネルギーや電気のことを生活者の目線で学び、考え、自分の判断で行動し、安全と安心の中で暮らしやすい町になることを願って活動。自主勉強会、電力との懇談会、シンポジウムも開催。



代表 歌代勝子さん



柏桃の輪との合同見学会
日本原子力研究開発機構 原子力科学研究所 原子炉安全性研究施設にて 総勢37名

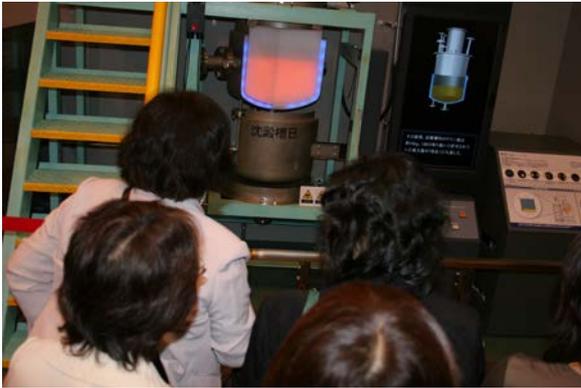
<実施概要>

2008年10月24日（施設見学と懇親会）～25日（交流会）

『くらしをみつめる・・・柏桃の輪』20名 + 事務局2名
しーきゅうぶ東海村 10名 + 事務局1名 計33名

原子力科学館で JCO 事故現場の模型を見学

シーキョウぶ東海村のメンバーのほとんどが、JCO 臨界事故をきっかけに、原子力施設の安全対策に関心をもつようになりました。その活動の原点である JCO 臨界事故現場の様子を原子力科学館でみていただきました。



模型による事故の再現を食い入るように見つめる皆さん



事故の原因、当時の様子、住民の思い、すべての説明に真剣なまなざし

原子炉安全性研究施設を見学

世界最大の原子力発電所を抱える新潟の皆さんと、原子炉の安全性に関わる研究施設を見学しました。「しっかりした研究に基づいて施設の安全が審査されていることを知って安心しました。」という感想が出ました。



実験施設内にて
原子炉の暴走を想定した実験が行われている



研究内容の説明
研究結果は国の審査に活かされていることが分かった

村上村長、原子力安全と東海村のまちづくりへの思いを語る

25日の交流会では、『くらしをみつめる…柏桃の輪』のご要望により、村上村長からごあいさつをいただきました。



<村上村長あいさつの要旨>

JCO 臨界事故を契機として、原子力安全行政は変化したが、規制機関である原子力安全・保安院が推進側の資源エネルギー庁とともに経済産業省の中にあるなど、規制の独立性などにまだ課題がある。

東海村にとって、原子力と離れてのまちづくりは考えられない。しかし、住民の意見はさまざまである。原子力との共生は今までと異なるまちづくりによって実現したい。今度 J-PARC*ができるが、これを定着させて原子力科学の新しい展開・文化をつくりたい。(* J-PARC：大強度陽子加速器施設)

国策で進められる原子力産業ではなく、文化となつてはじめて原子力は国民に受け入れられると思っている。そのためには市民がものを言い、原子力事業所が市民の声に耳を傾ける関係が重要。しーきゅうぶ東海村はそういう活動をしている。率直に原子力に対して意見を言うし、事業所もそれに応えるということをやっている。これは原子力を推進するための新しい方法だと思う。柏崎・刈羽地域も原子力と離れることはできないと思うので、今回の地震で経験した制度上の問題も含め、新しい付き合い方をしていく必要があるのではないか。



柏桃の輪としーきゅうぶ東海村、それぞれの活動について意見交換

お互いの活動を紹介した後、悩んでいることについて意見交換をしました。柏桃の輪からは、事業者意見に言う方法について質問があり、私たちの経験をお話しました。しーきゅうぶ東海村からは、活動を広める方策や活動資金の調達方法について質問しました。仲間を増やしていく活動のやり方についてたくさんのアイデアをいただきました。



佐藤代表から歌代会長へ花束の贈呈